

業務を持っている。いわば“敵艦見ゆ”の産業版というわけである。北九州というところは動きまわって唸りを生じ、手段をつくして地下資源を掘り、土地を造り、骨身を削りながらも立ち上がるようにするよな意欲に満ちた活力を感じさせる所である。(1968年6月29日)

国旗の文化地理

正井泰夫

地理には、アカデミックな分野と、応用・教育の分野と、趣味の分野がある。今ここに書くのは、第3の趣味の分野の地理である。

世界の国旗をずらりと並べてみると、赤・青・空色・白・紫・緑・黄・黒・褐色・だいだいなど、実にさまざまな色彩がある。では、赤系統の色彩はどのような国が使っているだろうか。地理学者なら誰でもやる方法、つまり分布図を作ってみよう。すると、2つの大きな傾向があることが分る。1つは、社会主義圏に多いことである。しかし、よく見るとソ連とアジアの社会主義国に多く、東ヨーロッパでは、西ヨーロッパと同様に多彩な色を使っている。もう1つは、温帯から寒帯にかけて多いことで、これは世界的な一般傾向である。

熱帯諸国の実情はどうであろうか。アフリカでもアジアでもラテンアメリカでも、緑・青・黄系統が圧倒的に卓越する。これは、熱帯圏の住民が、暑熱を連想させる赤系統よりも、清冷な感じの色彩を好むことによるのであろう。しかし、東南アジアには比較的赤系統が多く使われている。

国旗には、太陽・月・星がマークとしてよく現れる。これらのうち、圧倒的に多く見られるのは星で熱帯から温帯にかけて広く分布するが、特に熱帯に多い。彼らは日没によって生気をとりもどし、星にちなんだ物語りを発展させてきている。月となると、星と同じく夜の天体でありながら、専ら旧大陸、それも回教の分布と密接に関連した分布を示す。北アフリカから東アジアに分布が局限されているのである。太陽はどうであろうか。不思議なことに日本から東南アジアにかけての地域に多く、ほかは実に少ない。太平洋の西縁は、太陽信仰の本拠なのであろうか。色彩にも赤系統が多いのも、何かこれと関係しているのかも知れない。

国旗のデザインに十字架が使われることもいくつかあるが、そのほとんどはヨーロッパに限定されており、特に北ヨーロッパに多い。新大陸はいうに及ばず、中・南・東欧でもほとんど使われていない。

それに対して、3色を基調した国旗(例えばフランスの三色旗)は、北欧を除くヨーロッパから、アフリカ・西南アジア・ラテンアメリカへかけて広く見られる。しかし、東アジア・オセアニア・アングロアメリカでは、ほとんどかえり見られない。

以上を総合的にみると、世界の国旗の色彩と模様に見られた国民性は、風土（気候）と文化圏（伝統文化とイデオロギー）の両者によって大まかに規定されていると思われる。

お風呂の話

貝山久子

近頃の日経紙上に、家庭における子供、とくに赤ちゃんの沐浴担当者についてのレポートが出ていたことがある。これは東京を山手と下町にわけて調査したもので、山手では父親が担当する家庭が多いのに対し、下町では父親以外の者が担当する例が多い。これは山手方面には核家庭が多く、赤ちゃんの入浴は入浴それ自体より、あとの処理の方が熟練を要するのでそちらを母親が担当せねばならないのに対し、下町は商家が多いなどの関係で家族数も多く、必ずしも父親の協力を要しないのだそうである。

ところで我家では子供の入浴は概ね私の受持ちである。これは父親に依存することが時間的に無理であり、また「いくらパパでも男の人とお風呂に入るの一寸羞かしい。為でもあるが、小学校の6年と4年にもなった娘達と一緒に入るのは、子供達と一緒に過ごす時間の極めて少い私にとって、そこが絶好のヒューマンリレーションの場となるからである。学校での出来事、友人の噂、グループサウンズの話、考えたこと、たのみごとやこまごました注意 etc , お風呂場にはテレビもマンガも御馳走もないから、まことに意思の疏通がスムーズに行く。口と手が休む間もなく動いている間に、足の裏まできれいになっている寸法である。その上、週に一度は銭湯に行く。これは洗髪の為で長女の髪は長く豊富でとても家庭の風呂ではまかないきれいなのと、広い洗い場で存分にお湯を使い雰囲気は捨て難いからである。銭湯に行き出したのは戦時中燃料がなくて寮のお風呂がわかせなくなって以来の事であるが、浦和の銭湯も東京のそれも大体スタイルは同じである。しかし全国の銭湯が皆同じスタイルでないことは確かで、私の極めて乏しい体験から言えば、大阪では浴槽は一つしかなく、しかも洗い場の中央にあり、そのまわりにグルリとベンチ様の突出したものがあって、事実、人は皆そこに腰をかけて中のお湯を汲み出しては使うのである。混む時はそこが立錐の余地もなくなり、人の肩ごしに湯ぶねにとび込む勇氣はとて出ないと思われた。したがって所謂洗い場はコンクリートのままで、カランの数も少なかった。これは奈良女子大の寮に泊めて頂いた時も、洗い場が同じ様でとても座れなかったと記憶しているから、関西風なのかもしれない。昨夏福井県へ行った時、最近ようやく市に編入されたような田舎にも銭湯があって、早速行ってみた。ここはタイル張りになってはいたが、狭くてきたなく、シャワーがある事だけが取柄であった。

この稿を書くに当って手近な事典類をいくつかひもといてみたが、八瀬のかま風呂、愛媛県の石